

分科会	小6年・	郡市名	岡 崎
提案者	岡崎市立秦梨小学校		黒木 貴幸

1. 研究テーマ 学ぶ喜びを分かち合い、共生のあり方を問う社会科の授業
「決戦！秦梨城」と戦国時代

2. 研究概要

(1) はじめに

6年生の社会科の学習は、歴史学習から始まる。人物の業績や時代の様子などの学習から、それぞれの時代に生きた人々、為政者、民衆の思いや生き方を考えることによって、子どもたちが学んだことをこれからの将来へ生かしていくよう、子どもたちの課題追究の中で見つけさせていくことが大切である。

ところで、学ぶ喜びとは、子どもが確かな問題意識を持ち、問題解決に向けて追究し、人と関わって解決していく中で味わう満足感や成就感であると考え。さらに、時代の中で生きた人々の思いと関わって、自分の価値観を見つめ直すことができるような教材とで合わせることで、共生のあり方を問うことができる。そこで本実践では、戦国時代、秦梨学区で起こった「秦梨の戦い」や当時の秦梨学区を支配していた粟生氏の生き様を通して、見学・体験活動から子どもたちにしっかりと追究課題を持たせ、調べ学習を通して得られた確かな足場を持って話し合うことで、身近な歴史に生きた人々に共感したり、今の自分を考えたりすることのできる授業を目指したい。

(2) 学習教材の価値

上の考えに基づき、本単元は、学区の旧跡の「秦梨城」に関わる戦国時代の戦いから、当時の様子や人々の生き方を考えることを主に単元構成した。

戦国時代、全国各地で大名、豪族が群雄割拠し、勢力争いをくり広げていた頃、三河地方は、三河の松平氏、遠江の今川氏、尾張の織田氏、さらに信州の武田氏の勢力争いの場となっていた。その中で秦梨学区を含む中山郷の豪族たちも、どの陣営につくと生きていくことができるのか、生き方を選択しなければならぬ場面がたくさんあった。

この時代、秦梨を支配していた粟生氏は、鎌倉時代の初めに秦梨に入り、秦梨城、秦梨城山城の2つの城を作った。16世紀初頭、中山郷は、松平氏の支配下であり、粟生氏も松平陣営の一員であった。その後、三河地方は、勢力を拡大してきた今川氏の支配下になり、松平氏を含め、中山郷の諸豪族も今川氏の配下となった。しかし、今川氏の勢力拡大に対抗したい織田氏は、秦梨学区を含む奥三河一帯を支配していた奥平氏を配下にしてしまい、中山郷は一気に殺気立つ状態になってしまった。1556年（弘治2年）の2月、日近城（額田町桜形）の奥平貞直は、今川氏についていた秦梨城の粟生永信を攻め、これを手に入れた。それに対して、今川氏は、松平氏に日近城を攻めるよう命じ、松平忠茂を総大将として、日近城を攻めた。この後、数か月、秦梨城と日近城の間で戦いが続いたが、はっきりした勝敗がつかないまま、戦いは終わった。この後、奥平氏は再び今川氏に属することになった。1560年（永禄4年）、桶狭間の戦いで今川義元が織田信長に討たれたことによって、状況は一変する。これまで今川氏の配下にあった松平氏が今川氏と敵対してきた織田氏と手を結ぶことになった。この結果を受け、粟生

氏は、永信が今川氏に属し、息子の長蔵が松平氏の家来になった。秦梨城は、松平氏の家来、酒井図書に明け渡し、粟生氏の秦梨支配は終わった。

ここに、この時代の縮図が見られる。桶狭間の戦い（1560年）をはさんで、今川と織田の力関係が一変する。昨日まで味方だと思っていたものが、今日には敵として自分に向かってくる。粟生氏は松平に助けられ、同じ松平によって滅ぼされたのだ。地元の殿様がたどった運命、このことに子どもたちが気づくと、また、親と子がそれぞれ違う生き方を選択しなければならない事実を目の当たりにすると、きっとそこに戦国時代の人々の生き方についての共感や時代についての思いがわきあがってくるであろう。また、一地方の戦いではあるが、織田氏、今川氏、松平氏といった戦国大名が大きく関わっていて、それらの大名たちの思惑や大名の思惑に翻弄された地元の殿様の様子や心情などを多面的にとらえることができる。ここに時代を超えた、共生につながる教材性を感じるのである。

（3）研究の基本的な考え方

めざす子ども

本校は岡崎の東端に位置する小規模校で、6年生は男子5名、女子4名の9名が在籍している。本単元までの子どもの様子としては、歴史に興味・関心を持っていない子どもが多い。中でもG子は、「歴史学習はイヤだ」と公言してはばからないほどだ。その原因として、学ぶ喜びや楽しさを感じさせることができず、子どもの問題意識を十分に高めることができなかつたからと考える。それに対して、B男の歴史学習に対する意欲は高く、歴史的事象について深く考えることができる。

そこで、子どもたちの問題意識を高め、調べたことを発表したり、話し合ったりすることによって、お互いの考え方を学び、交換し深め合うことができる場を作っていくことが、子どもたちの学ぶ喜びを膨らませるには不可欠であると考えた。子どもたちが身近な地域を調べたり、見学体験したりすることで、共通の問題意識を持ち、話し合いを深めることができるからである。問題を解決するとともに、こうした取り組みによって、先人の考え方や苦悩を知り、歴史に対する考えを深めるとともに、自分自身の生き方を見つめ直す子どもに育てたい。

研究の視点

本校では、運動会のぼうし取りを「決戦秦梨城」と名付けて行っていて、ふるさとカルタの中には、「粟生の殿様」という札がある。また、昨年遠足で秦梨城跡を見学し、このことから子どもたちは、秦梨城があったことや粟生の殿様がいたことを知っている。しかし、どのような戦いがあったとか、粟生の殿様がどのような運命をたどったとか、知っている子どもはいない。したがって、より目的意識を持って秦梨城を見学し、興味関心を高める場を設定することにした。

さらに、一地方の戦いにもかかわらず、織田氏、今川氏、松平氏といった有力武将が関わっていることを知ることで、身近な地域の出来事が全国の歴史へとつながっていることに気づき、その驚きや感動から、学習を深めていくであろう。

この学習では、まとめとして、2学期の学芸会で演じることを目標として、今回調べたことを劇化し、学区の人々にも、当時の人々の苦労や願いを分かち合ってもらいたい。ここに地域との「共生」がある。このような大きな目標を持ちながら学習をふくらませることで、学習が発展し、学区・地域の一員としての自分のあり方を問い直し、学区を大切にしようという気持ちが膨らんでくれることを願う。

研究の仮説とアプローチ

< 仮説 >

歴史的に有名な戦いと学区の歴史とのつながりに焦点をあてて学習を進めることで、たくさんの疑問や発見を導き、興味・関心を高めることができるだろう。

この単元を進めるに当たって、まず導入段階では、同じ愛知県の中での長篠の戦いの合戦図をじっくり見つめることで、戦国時代の戦いや城について興味・関心を持たせたい。戦いの絵図を見ることによって、戦国時代の戦いのイメージをつかむことができ、それが秦梨城の戦いをイメージすることに役立つのではないかと考える。また、長篠の戦いがあった場所が岡崎から近く、秦梨城の戦いに関わっている織田信長、徳川家康（松平）も登場しているので、より興味・関心が高くなると考える。

< 仮説 >

子どもたちが調べる視点を明確に持って見学・体験活動を行い、話し合うことで子どもたち同士による情報交換が活発化し、学ぶ喜びを分かち合うことができるだろう。

長篠の戦いや秦梨の戦いを調べて、戦国時代の戦いのイメージをふくらませたところで、秦梨城山城の見学を行う。城へと続く細い山道を歩くだけでも、城へのアクセスの困難さや、戦いの場が急な斜面であったことなどから、当時の戦いの様子をイメージしたり、この道を敗走した兵士の思いにせまったりすることができるであろう。こうした体験活動を通して、織田氏、松平氏、今川氏といった戦国大名の思惑で翻弄された地方の殿様の苦しさや悩みにせまる手がかりとなるであろうと考える。

< 仮説 >

桶狭間の戦い以後の粟生の殿様親子の行く末について話し合うことで、当時の人々の大変さや苦勞・願いなどを理解し、今とつながる共生を考えることができるであろう。

最終的に粟生氏親子は、戦国時代の勝ち組（松平氏）と負け組（今川氏）に身を任せることになる。味方だと思っていたものに裏切られていく事実や、今までの恩というつながりを通して、自分ならどちらの立場を取るかについて、子どもたちの視点で考えさせたい。このことを考えることで、戦国時代の地方の小さな殿様や民衆の気持ちや苦悩に迫ることができ、その時代に生きた人々の一生懸命な生き方に対して、共生の意識が芽生えるであろう。さらに、この話し合いから、戦国時代とはどのような時代だったのかという認識が深まることを期待している。

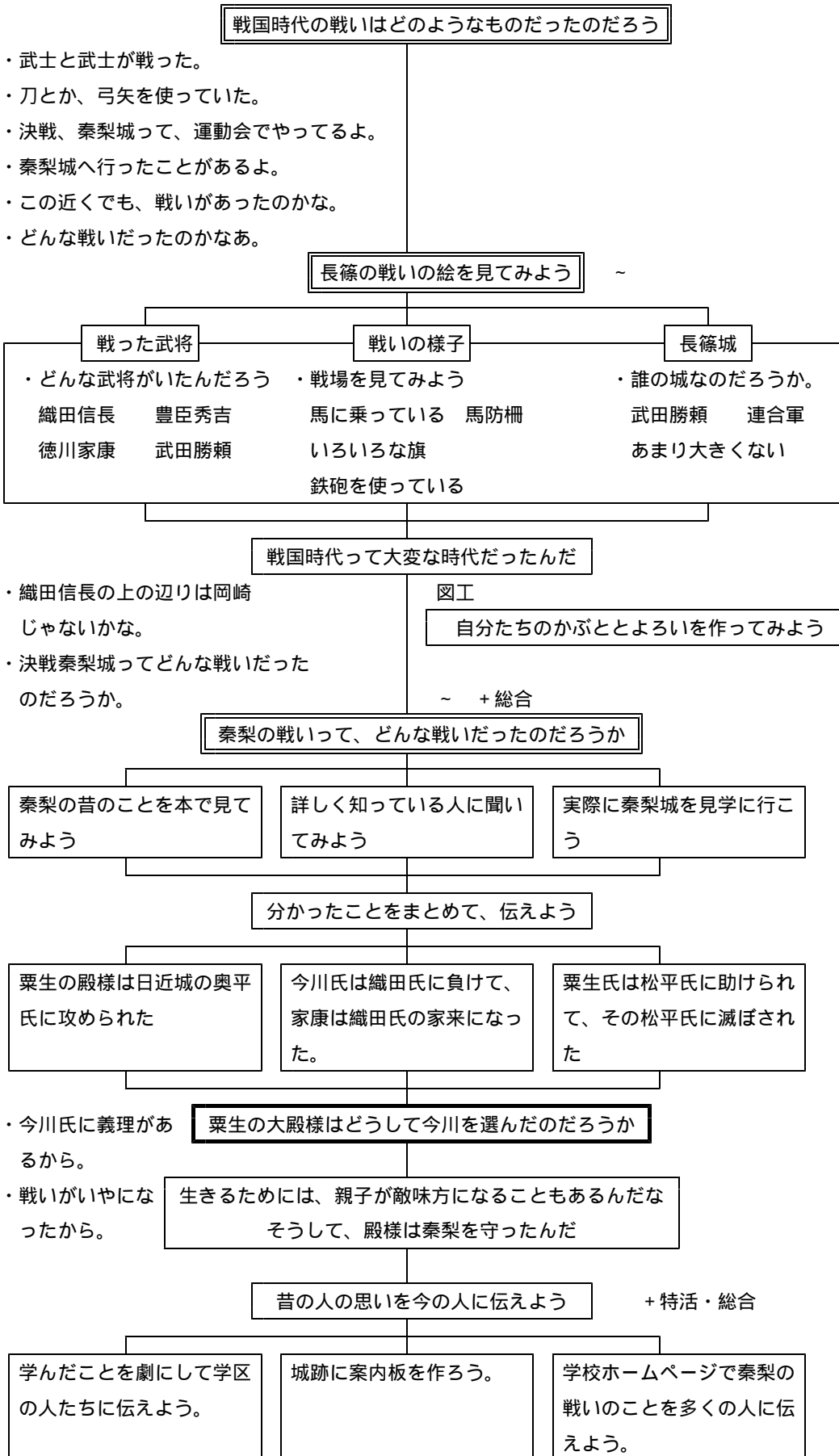
ところで、本単元の学習を進めるにあたって、実際には資料が乏しく、岡崎市史など、手がかりとなる資料が子どもにとって難解であるので、となるため、「決戦！秦梨城」という冊子を作り、読みづらい資料を易しく書き砕いて、子どもたちが無理なくひとり調べができるようにした。この資料を単元の学習の中心となる資料とし、それぞれの子どもの学習の共通基盤とするようにした。

3. 単元計画

子どもの反応

学習の流れ

教師の支援



武士の世の中について、秦梨城の戦いに目を向ける場を設ける。

戦国時代のイメージを広げるため、長篠の戦いの合戦図を提示する。

岡崎の位置や3人の武将を確認させる。

「決戦！秦梨城」の資料を提供する。

後に見学の様子を想起できるように、見学の様子を、ビデオやデジカメで撮影する。

大殿様、若殿様、民衆立場を明確にして思いを考えるようにうながす。
発表の際には、自分の考えの根拠をはっきりさせるよう指示する。

4. 研究実践

(1) 長篠の戦い絵図から

秦梨の戦いに触れる前に戦国時代の戦いのイメージを広げるために、子どもたちが持っている社会科資料集に掲載されている長篠の戦い絵図に注目させた。すると子どもたちは戦いに参加した武将、旗指物、戦い方などに着目していった。その中で、B男は、合戦図を食い入るように見つめ、虫眼鏡を使って小さくて見にくいところも見ようとした。自分の名字に入っている徳川の「五」の旗を見つけ、うれしそうに活動をし、何かを見つけるたびに声をあげた。

この後、「絵図の中にある長篠城が織田連合軍のものか、武田氏のものか」と問いかけた。これに対して、A男、B男を中心にして、「武田だ」、「いや連合軍だ」と話し合いに盛り上がりが見られた。それにC男、D男も加わってきた。なぜそのような考えに至ったか、理由を求めたところ、資料1に見られるように、皆、もっともな理由を付けることができた。積極的に発言をしなかったものの、G子も自分なりのしっかりとした考えを持つことができた。意見がもてるための十分な観察や下調べの時間を保証し、子どもの心を揺さぶる発問をすれば、子どもの学習意欲が高まることが分かった。

資料1 B男とA男の発言内容

B男... 連合軍の城。城のすぐ近くで「五」の旗をつけた武士が戦っている。この人は長篠城から出てきて武田と戦っている。

A男... 連合軍の城。長篠城は元々今川の領地だったが、織田信長が桶狭間の戦いで今川を破ってからは、織田の領地になっていたから。

(2) 絵図に描かれている武将についてのひとり調べ

持っている資料集の絵図には、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康、武田勝頼の名前が書き込まれている。そこで、この頃の時代背景を押さえておくことも考えて、興味をもった武将を追究させることにした。

織田信長を調べた子どもは、桶狭間の戦いについて一様に「2万の今川軍に対して2千の織田軍がなぜ勝てたのか」という疑問を持ち、さらに今川義元とは何者かという疑問が生まれてきた。徳川家康を調べた子どもは、幼少期の家康が織田氏や今川氏の人質であったという事実を知り、驚いていた。また、この子どもたちには、秦梨の戦いのことも考えて、桶狭間の戦い以降の家康の動きに注目するように助言した。

歴史学習に対して、人一倍興味を持っているB男は、唯一、武田勝頼を選んで、使えそうな図書資料を片っ端から探して、意欲的に人となりをつかもうとしていた。そして武田が敗北した原因を「鉄砲を買うお金がなかった」、「これまで騎馬隊で勝ち続けてきたので、それにこだわった」と考えた。

(3) 鎧や兜の製作

ここまで学習が進んできたところで、子どもたちの中から「鎧や兜を作りたい」という声があがった。そこで、図工の時間を使って、甲冑作りをすることにした。男子は、やる気満々であったが、女子は、恥ずかしいらしく、男子ほどの反応は無かったが、刀を作るよう言ったところ、張り切って作り出した。

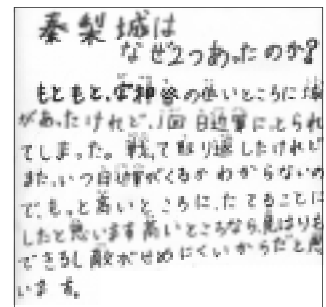
鎧作りの男子は、図書資料を参考にしたり、全くの想像であったりと様々であった。しかし、いずれの子どもにも共通していたことは、いかに敵の攻撃から自分のみを守るかということで、段ボールやひもをうまく使って鎧を作っていた。少しでも、身に付けて、防御具合を確かめていた。一方、女子も刀作りに没頭し、刀に刻まれていた刻印まで書き写すほどのこだわりようだった。

秦梨城の見学に行く時には、自分たちで作った甲冑を身に着けて、ちゃんばら（合戦の体験をしたいな）をすることに決まった。

（４）秦梨の戦いについてひとり調べ

ここでは、「秦梨の栗生氏」、「秦梨と日近はなぜ戦ったのだろうか」、「今川義元は何をやった人なのか」などの問題意識を持って、教師自作の資料を活用して、秦梨の戦いに迫っていった。子どもたちは、栗生氏の先祖が、系図では藤原道長であったことに驚いたり、栗生氏（秦梨）と奥平氏（日近）といったご近所同士が敵味方になってしまう戦国時代の様子に矛盾を感じながら、学区の気づかなかった歴史を調べることができた。

資料２ G子のひとり調べ



G子は、「秦梨城はなぜ2つあったのか」をひとり調べのテーマに決め、調べを進めていった。初めは、何となく、1つがとられてしまったから、もう1つ造ったのでは、と考えていた。しかし、実際に城を見学してみると、2つの城が造られた場所の高さの違いに気付き、2つの城の性格の違いを見いだした。

（５）秦梨城山城跡へ行ってみる

秦梨には、2つの城がある。1つは鎌倉時代に造られた「秦梨城」で、もう1つが戦国時代に造られた「秦梨城山城」である。秦梨城はふだんからなじみがあるが、秦梨城山城は、麓からおよそ70mの山の上にあったそうで、山道を登って行かなければならない。

そして、いよいよ男子は図工の時に作った甲冑を身に着けて、女子は男子の後に続いて出陣した。城跡へ続く山道に入ったとたん、男子の武将気分は一気に高まり、「俺の後に続け!」、「遅れるな!」といった勇ましい声が飛んだ。山道は途中から笹が生いしげり、長い間、人が入っていないようで前へ進むのに苦労したが、城を攻め上らんとする子どもたちは気合い十分のまま歩き進んでいた。植林された杉林を抜けたところに城跡があった。城域は予想以上に狭く、城を形成していたであろう遺構は全く残ってい



なかった。子どもたちの感想は、一様に「狭い」であった。このことから秦梨城山城は、一般的な「城」というより、砦に近いものだという考えを持つ子どももいた。

城跡を見学した後、男子はちゃんばらに興じた。杉林の中で敵味方に分かれ、女子が作った刀を振りかざし、走り、斬りつけ、討たれていた。ちゃんばら（合戦）を通して、軽い段ボールとはいえ、鎧を身にまもって戦うことの大変さをそれぞれ感じていたようだった。

(6) 大殿様の選択について話し合い

「粟生の大殿様はどうして今川氏を選んだのだろうか」という子どもの思いが出てきた。それは、追究の中から、織田に負けた今川に、なぜ、殿様はついていこうとしたのだろう、という子どもの疑問である。このことを共通課題とし、話し合いの場を設けた。

子どもたちからは「今川に恩がある」「今川にお世話になった」といった意見が出され、多くの子どもがこれに同調しているようだった。しかし、C6が「自分の力を見せつけたかった」、C7が「今川氏を助けたい」という意見を出した。続いて、C8が「大殿様は、今川の勢力にかけていたから」という、桶狭間の戦い直前の今川義元の影響力の大きさを意識した意見を出した。この話し合いの中で、織田信長に破れた今川氏の建て直しのために大殿様が今川氏を選んだという考えに落ち着いた。続いて、松平氏を選んだ若殿様の気持ちについて尋ねてみた。すると、全員が「勝

ここで、子どもたちの考えに矛盾が見える。「恩返しをしたいから今川氏」という気持ちと「勝った方につきたいから松平氏」という気持ちだ。そこで、「2人とも今川氏、または松平氏のどちらかについたらどうなるか」という問いかけを試みた。すると、C4が「日近との戦いは織田氏と戦ったのと同じで、大殿様は織田氏が嫌いだから、松平氏につかないと思う」、C9が「粟生氏は、今川義元から感謝状をもらったぐらいだから、それを裏切ることができないと思う」と意見を出した。子どもたち全員の本音は「強い方につきたい」であるが、歴史的背景を考えると、どちらかを選ぶことはできず、迷ったあげく、大殿様が今川氏、若殿様が松平氏についた、という結論になった。

さらに、松平氏についた若殿様が結果的に城から追い出された事実についてどう思うか尋ねてみた。子どもたちからは、当然のように「若殿様がかっこいいんだ」という意見が出た。C8のように若殿様の行く末まで考える子どももいたが、C1(B男)は、今川氏についた大殿様について触れて、「今川氏を裏切った松平氏が粟生氏を裏切ることが目に見えていたので、大殿様は生き延びるために今川氏についたのではないだろうか」という、他の子どもの視点とは違った意見を出した。他の子どもたちにとって、B男の意

T	粟生の大殿様はどうして今川氏を選んだのでしょうか。(課題確認)
C1	今川に恩があるので、このまま今川の家来になろうと思った。
C2	恩があるからだと思います。(C3同)
C4	今川にいろいろお世話になったし、松平よりも関わりがあったから。
C5	信長に破れたけど、今まで面倒を見てもらったから、今川氏を選んだ。
C6	今川が負けたから、自分の力を見せつけたかった。
C7	自分の力で今川氏を助けたい。
C8	大殿様は、今川氏の勢力にかけていたから。

T	2人とも今川氏、または松平氏のどちらかについたらどうなるか。
C1	両方に恩があるから、どちらか一方につくことはできない。
C4	日近との戦いは織田氏と戦ったのと同じで、大殿様は織田氏が嫌いだから、松平氏につかないと思う。
C9	粟生氏は、今川義元から感謝状をもらったぐらいだから、それを裏切ることができないと思う。

T	若殿様は、松平氏に城を追い出されましたが、どう思いますか。
C3	若殿様がかっこいいんだ。
C8	若殿は百姓になったのかなあ。
C1	大殿様は、こうなることが分かっている生き延びるために今川氏についたのでは。
C8	もし大殿様が生き延びたかったなら、織田氏についたと思う。

見は自分の見方を変えるきっかけとなった。子どもたちの授業後の感想を見ても、「生き延びるためだったのかな」という記述が多く見られた。

粟生の殿様は、松平氏（織田氏）と今川氏の2大勢力の間で悩んだと思うが、それと同様に子どもたちも悩み、それぞれの殿様の思いに迫れたのではないだろうか。

感想
大との様子が、どういう理由で、今川氏に付いたのかかわからなくて、みんな「思」って言うから、そうかと思っ、ていつか今日、B君に「生き延びたいだけか」と言われると、そうも思いました。もし、生き延びたいだけだと、今川に付いたとしたら、百姓や、子、つうの人が「かわいそうだ」と思いました。大との様も、若しの様も、まよ、だと思っ、ています、でもわたしは、なに、か、い、か、な、い、と、い、け、な、い、理、由、が、あ、つ、た、ん、だ、と、思、っ、て、い、ま、す、理、由、も、予、想、せ、ま、さ、な、い、な、ら、う、な、

5. 研究の成果と今後の課題

秦梨学区の歴史に焦点を当てながら、秦梨の戦いや粟生の殿様の思いに迫った授業を展開したことで、次のような成果が得られた。

- ・ 身近な地域の歴史を追究することで、歴史学習への関心が高まり、課題や疑問に意欲的に取り組むようになった。
- ・ 調べ学習や見学活動を行ったことで、共通の課題や話題が明確になり、友達同士での関わり合いや話し合いによって、新たな発見や感動を得られることができた。
- ・ 体験活動やひとり調べをしたことを基に、粟生の殿様の選択について話し合い、殿様の思いに迫った考えが出され、戦国時代の一地方の武将の苦悩に思いを巡らすことができた。

調べ学習や見学・体験学習を充実させたことで、学習の成果を自分だけのものとせず、友達同士で分かち合う場面が見られたり、人物や人々の思いに迫った考えを導き出したりすることができた。特に、話し合い活動では、9人全員が何らかの考えや思いを発言することができ、問いかけに対して競い合うように発言を繰り返す場面が何度も見られた。気になっていたH子はびっくりするぐらい発言回数が多かった。また、これまで「歴史イヤ」と言っていたG子のノートの片隅に「秦梨すごい」の文字を見つけた。一地方でありながら、歴史的に有名な武将が関わっていた郷土の意外性に驚き、これが彼女の学ぶ意欲を高めたと思われる。

一方で、本單元では、歴史的に残存する資料が乏しかったり、研究物が難解だったりしたので、子どものために「決戦！秦梨城」という、史実に基づいて書き砕いた資料を構成した。これは、子どもたちに読みやすく、共通の教材として、適切であったと考える。こうした支援が身近な地域の教材化には不可欠でそのために子どもたちの郷土理解も進んだ、と考える。

子どもたちは、今回学習したことを基に、自分たちで「決戦！秦梨城」の台本を作って、2学期の学芸会で演じることを決めた。学区の人々にも、当時の人々の苦勞や願いを伝え、分かち合うことで、地域を中心にした「共生」を目指したい。